1959年1月31日第三種郵便物認可

週刊 うたごえ新聞

11／24 (1986年) NO. 1134

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒160 東京都新宿区大久保2—16—36
☎ 03 (209) 0638 FAX 03 (200) 0105
振替口座 東京2-5631 毎週月曜日発行
1部120円(〒25円)・月480円(〒120円)

島の未来は、ワシらが決める

観光用のハデさはないが
労働と生活から生まれた島の芸能

スポット この人にききたい

一九八三年十月の大噴火で三百三十もの家家が熔岩に飲みこまれ、農地、山林などが埋没。以来、自然を破壊し平和を脅やかす米軍飛行場建設に反対し、たたかいながら復興をはかってきた三宅島。

十一月二日、三宅島の阿古（あこ）小学校は、四年ぶりの郷土芸能まつりに繰り出した二千数百人の人びとでにぎわいました（三宅島の総人口4300人）。

災害復興式典が開かれ、同じ敷地の中学校では大噴火の被害とその後の復興を物語る写真展。小学校体育館では島の伝統芸能が次つぎと披露され、グラウンドには、明日葉（あしたば）やサツマイモなどのテンプラ、里イモ、島の焼酎、くさやのヒモノなどのテントが出され昼の二時過ぎには品切れの大盛況。

「おばさんたちがカッポウ着で喜々として働いていたし、苦しい時だからこそ、やってよかった」と、体育館では舞台に拍手し、テントの裏では三宅島の味に舌づつみを打っていた寺澤晴男村長（49歳）です。

〝復興途上だし、まだ芸能祭などやれる時期ではない〟という米軍飛行場賛成派の声もありました。

「それも一つの見方だが、いつまでも暗い気持では……。学校、道路、家屋は再建したし、気持を明るくして働けば、いつかは借金も返せる」、と芸能祭実施にふみきった、といいます。

寺澤村長は当初（83年末）軍事飛行場建設推進に動いていた村議会十四人中、たった二人の建設反対派の一人でした。しかし、有権者85％反対の島民世論が、やがて自分たちの村長を生み出し、議会の勢力比も逆転させたもの。

議員はガラじゃないが…

「初めは議員はガラじゃない。一期でやめようと思っていたんですが…」という村長は、元・中学校教師です。

三宅島で生まれ育ち高校卒業後、海を渡って国学院大学文学部へ。そして青ヶ島と狛江市の中学を歴任し、社会教育主事となります（狭山青年の家、立川社会教育会館につとめたことも）。やがては教師として島に帰る夢を持っていたが、そのチャンスはなく、折からの観光ブームに乗って、新潟生まれの奥さん（敬子さん）と一歳になったばかりの希（のぞみ）ちゃんを連れて帰島。喫茶・軽食店「サンライズ」を始めたのは一九七三年でした。

そこへ前歴を買われて、三宅中学の国語講師をたのまれたり、自治会の役員を引きうけるなど、数年の世話役活動をへて、村議に推せんされ、一期でやめようと思っていた矢先に大噴火と米軍飛行場問題。引くに引けずについに現職に至ったものです。

野鳥の声と万葉集

「豊かな自然を守りたい。こんないい島を我われの代でつぶしたくない。三宅島にふさわしい復興、発展の仕方があるんです」と、島民世論を代弁する寺澤村長。

中学一年生の時、毎日六時頃の島の朝、野鳥の声と一緒に国語の先生が吟ずる万葉集に聴きほれた。それが当初、島の教師を志した動機です。

「社会教育主事や議員時代の経験、そして青ヶ島での教師体験がすべて、今の仕事に生かされています」。

役場と学校と駐在所にしか電気がなく、サツマイモ、サトイモが主食だった、という当時の青ヶ島で、新任すぐわずか八人の二年生を担当。身体をはって、米やサツマイモを盗む札つきの〝ワル仲間〟をさとしたり、自作の英語劇の大道具、小道具づくりで子どもたちと徹夜したり。貧しかったが心通いあう人間関係と教育体験が生きています。

三宅島の芸能は観光用にアレンジされてはいないが、島の労働と生活の事実に裏打ちされ、にじみ出ている、と島の文化についての確信と思いは、語り尽きそうにありません。戦後の「リンゴの唄」の大ヒットをふりかえりながら、「歌は情感に訴えて心と心を結ぶ。世界中どこでも安心してうたえるようになればいいですね。三宅島の歌をぜひ広めて下さい」と、うたごえ運動への期待を語ります。

二人の娘さんの名は、希（のぞみ）と朋（さかえ）。「二つの字を合わせて下さい」、と相好をくずしました。（道）

米軍飛行場建設に85％の島民が反対する三宅島の村長
寺澤晴男さん

'86日本のうたごえ祭典 開催迫る
愛知中部

関連3～6・8面

今週の記事

◇三多摩青年合唱団三宅島公演
◆随行ルポ（本紙編集部） 3面、渡辺千恵
◇子さん、〈平和の旅へ〉を語る 4・5面、
◆合唱発表会本選出場団体 6面、
◇〝うたごえは平和の力—愛唱歌で綴るうたごえ運動の歴史〟（第3回 ロシア民謡・ソビエト歌曲） 7面

ふめんだい

ジャーナリスト会議の集まりがあった時、あるラジオの女性D・J（ディスク・ジョッキー）に話を聞く機会があった。

彼女曰く「華やかなようだけど、毎日、顔、合わせるのはマイクとスタッフだけ、こんな孤独なことはない」というような話をしていた。

☆ ★ ☆

そんな彼女が励まされるのは聴者からのハガキ（投書）だという。

名もない人たちが、ちっぽけな夢をもちながら、悩み、苦しんで、毎日、精一杯生きている。そんな生生しい悩みや相談などが投書されてくると、自分のやっていることが少しでも役に立っているんだと思う、と。

☆ ★ ☆

大マスコミも本紙のようなところも、読者（あるいは聴衆）に支えられている、という点で変わりはない。

自戒も含めて、ともすると本紙の位置付けを組織の面からのみ強調しがちである。

うたごえを知らない読者とも、一人一人の要求、生き様と結び合うような、〝読みたくなる紙面〟にしたい、と拡大月間終盤にあたって、改めて思う。（F）

★…おことわり…★
次号は12月1・8日合併号（11月21日発送）でお送りします。
なお、さ来週は、日本のうたごえ祭典開催のため休刊させていただきます。12月15日号の発送は12月5日です。 うたごえ新聞社